

## K. マンスフィールドと樋口一葉 — ‘The Garden Party’ と『たけくらべ』を中心に —

### A Comparative Study on the Theme and Expressions Between ‘*The Garden Party*’ by Katherine Mansfield and ‘*Takekurabe*’ by Ichiyou Higuchi

船 木 よし美

FUNAKI Yoshimi

#### I はじめに

樋口一葉（1872-1896）は2004年11月、五千円札の表肖像になった日本を代表する明治の女性作家である。24歳で夭折する迄その作家活動はわずか5年足らずで、しかも残された作品は小説22編、16歳の時から書き始めたといわれる日記と3000首余の和歌だけである。正規の学校教育は青梅学校小学高等科第4級、11歳で終わっている。その後、14歳の時小石川安藤坂にあった中島歌子の「萩の舎」に入塾して和歌を習っているが、江戸の雰囲気はまだ色濃く残っている明治の初期～中期に、まさに日本近代小説の祖とも言われる作品を残しているのである。

一方、キャサリン・マンスフィールド（Katherine Mansfield 1888-1923）は、ニュージーランド出身のイギリスの女性作家で、短編の名手と謳われ、短編に新しい手法を持ち込んだとして英国文学史の中で燦然と今も耀き続けている作家である。彼女もまた34歳の若さで結核で亡くなっているが、その死ぬまでの10年余りの作家活動の中で、88編の作品と雑誌の書評、死後発表された日記と詩集を残している。

ほぼ同時代に、イギリスと日本で彗星の如く現れ、一見何のつながりも持たないように見えるこの二人の女性作家は、実はいくつかの共通項をもっている。例えば、

1. 作家になろうと実際に行動を起こしたのは、ともに19歳の時である。

一葉は、生計を立てるために作家になろうとして、その手ほどきを頼みに、当時朝日新聞の記者であり作家であった半井桃水の家を訪ねたのは、1891年（明治24）4月15日、19歳の春である。

一方、マンスフィールドは、ロンドンのクイーンズ・カレッジから姉たちと一緒にニュージーランドに連れ戻されて後、ロンドンの刺激的な生活が忘れられず、作家になろうと決心して、家族の反対を押し切って、ウェリントンの港から船に乗って単身ロンドンへ出てきたのが、1908年19歳の夏である。

2. 二人とも結核で、一葉は24歳、マンスフィールドは34歳で亡くなっている。
3. 二人とも、子供はいなかったが、子供の描写には特にすぐれて定評がある。
4. 二人ともストーリーテラーではなく、日常の平凡な生活、瑣末な出来事を丹念に丁寧に描き、そこから人生の重要な問題へと導いてゆく。
5. 二人とも小説家であると同時に、詩人であった。

妹のくには回想録「心の花」の中で、「姉は、歌はほんとうにすきで、短いもので最も自分の心をこめられるものは歌である、と考えていました」と述べている。

森鷗外は『めざまし草』第四号の中で、一葉を「まことの詩人」と賞賛している。

マンスフィールドは、‘Then I want to write poetry. I feel always trembling on the brink of poetry <sup>(1)</sup>’と日記に書いている。1923年Constable社から‘Poems’が刊行されている。

6. 二人とも日本にそれぞれ個人の文学記念館がある。

一葉記念館は、東京都台東区龍泉寺町に、1961年（昭和36）5月1日に我国初の女性作家個人の文学記念館として建てられ、広く一般に開放されている。

マンスフィールド記念館は、2004年（平成16）福島県泉崎村新田東山に日本マンスフィールド協会会長大澤銀作氏によって建設された。

本稿では、この二人の天才作家の代表作である『たけくらべ』と*The Garden Party*を主に比較考察の対象とし、そのテーマ、作品の構成及び表現上の特徴などを抽出し、二人の文学的特性・資質に関して、その類似性について詳らかにしたいと思う。

## II K. マンスフィールドと一葉を結びつけるもの

K. マンスフィールドを日本に初めて紹介した人は、1905年（明治39）イギリスOxford大学留学から帰国した平田禿木であった。1923年（大正12）7月15日発行の『英語青年』誌上で、作家K. マンスフィールドを紹介し、‘*Bliss and Other Stories*’と‘*The Garden Party and Other Stories*’の短編集を褒め、さらに‘*At the Bay*’の梗概を3回に渡って掲載している。ここでは、次のように紹介している。

最近二・三年英吉利の文壇に短篇小説勃興の機運が熟しかけ、数多の新作家旧作家がその方面に色々の試みをした其の中にあつて、女性のことで、別に素晴らしい大立者といふ程ではないが、兎に角群を抜いて頗ると傑出して、その作は必ず後代に伝はる、永い生命のあるものと自分などにも思われる、天才的の作家であるのです。

平田禿木は、1923年（大正12）『サンデー毎日』に‘*The Doll's House*’を、1924年（大正13）『英語青年』に‘*Bliss*’、『サンデー毎日』に‘*The Fly*’、1925年（大正

14) ‘Honeymoon’ と ‘Bliss’ の翻訳をアルス叢書から出版している。数多くのイギリス小説を翻訳し、日本に紹介した禿木自身「誰が何と言おうと、自分はやっぱりマンズフィールドが好きだ。」と言っている。

この平田禿木こそ、実は一葉の日記に頻繁に登場してくる人物である。禿木が初めて一葉を訪問した時の様子を、一葉は、1893年（明治26）3月21日の日記に、次のように書き記している。

午後文学界の平田といふ人訪ひ来たり、国子の取次ぎに出たるを呼びて、とし寄りかと問へば否まだいと若き人なりといふ、やましけれど逢ふ、高等中学の生徒なるよし、平田喜一とて日本橋伊勢町の絵之具商の息子なりとか、年は二十一といふ、何用ありて来給ひしとも流石にいひがたければ物がたり少しするに、詞かず多からず、うちしめりて心ふかげなれど、さりとして人がらの愛敬ありなつかしき様したり、（筆者中略）我れは又これより折々参り寄らんにゆるし給へかしてやうゝ日のくれなんとするたつ、

初めての訪問にもかかわらず、禿木は3～4時間も話し込んでいったことになる。

当時彼はまだ第一高等中学校の学生で、北村透谷や星野天知、島崎藤村らと同人雑誌『文学界』を発行していた。下谷に下宿していた禿木は、学校の行き帰りに友人を誘っては、一葉の家を訪れていたことが一葉の日記にたびたび書かれている。一葉の作品を読んで、明治の文壇にメジャーデビューさせた陰の功労者がこの平田禿木である。その頃、一葉は、師事していた半井桃水が、一葉の作品を発表するためにその発刊に奔走したと考えられる雑誌『武蔵野』に作品を発表していたが、1892年（明治25）11月20日、いよいよ『都の花』<sup>(2)</sup>に自分の小説が出るのが分かって、「むさしのゝゆかりあるかの大人にこの事つげずばいかゞ」と言う母親の言葉に後押しされて、久しぶりに桃水を訪問し、そのことを報告する。次のように日記に記されている。

都の花のことかたるに、そはいとよき事成かし、何方にまれ筆とりておはしまさばよろこばしき事ぞかし、我がしれる友などもみな惜しみ合ひてありしものをなどかたらる、さる頃明治女学校の教師なる何某といふ人我がむさし野へ君のこと頼みに来たり、女学雑誌に執筆あり度しといひたれど、

この明治女学校の何某という教師は星野天知ではないだろうか。明治女学校はキリスト教系の学校で、星野はその教師であった。同じ年の12月26日、「萩の舎」で和歌の同門である田辺龍子の新居を訪ねる。そこで、『文学界』への執筆を頼まれる。その日の日記には次のような記述がある。

一葉女史の事はしもかねて女学生に論じたる如くその妙想に感じ居れば是非小説の著作を依頼したく其方様より依頼して給はれと星野君より手紙来たりぬ、其女学生の評は見給ひしやと問はる、否しらずと言へば龍子君もまだ見ず見度ものなり、兎角は是非かきて給はれかし、一ツは御名誉にも成り此のちのお為にも成るべければなどいはる、三十一日までにとの約束にて暇乞して出しが、

星野天知が田辺龍子に手紙を出して、一葉に小説を書いてほしいと頼んでくれるように言っている。この星野天知に一葉のことを推挙したのは、禿木ではないかと思われる。その辺のところを禿木自身次のように語っている。

(前略) 二十五年の秋、「都の花」に発表された「埋れ木」の一篇を見て初めて女史の作に接し、翌二十六年の春「文学界」へ送ってきた「雪の日」の稿を手にして、今までになき女流の偉才此処にありと、当時通っていた一高から遠くもないので、思ひきって突然菊坂の居に女史を驚かしてみた。取り次ぎに出たのは邦子さんで、背の高い、大柄の、色の白い、面長な人であったが、いそいそと自分を迎えてくれ、奥の八畳へ請じ入れられた。やがて女史も座敷へ出て来たが、地味とも何とも、如何にもくすんだ服装で、何う見ても三十か、それを一つ二つ越したと見える古けた様子で、男女七歳にして席を同じうせずといふ風に、ずつと引き下がって、端然と席の一隅に陣取ったには驚いた。(筆者中略) 自分が敢えて一葉女史を発見したといふ次第ではないが、兎に角この訪問が契機となって、女史と「文学界」との縁が固められたのである。

(昭和14年8月、「大陸」)

一葉と禿木は年が一つしか違わないのに、一方は一高の制服を着た背高き青年、片方は30歳以上にもふけてみえるくすんだ服装で部屋の隅に座していたとあるが、二人は文学の話でいろいろ話が盛り上がったことが日記から伺い知ることが出来る。

以上見てきたように、なんの繋がりもなさそうに見える二人の作家は、平田禿木を通じて、見えない糸でつながっているのである。

### Ⅲ. 『たけくらべ』と *The Garden Party* の主題と構成

『たけくらべ』は、雑誌「文学界」に1895年(明治28)1月から翌年の1月までの約1年間に渡って、断続的に発表され、その後、1896年(明治29)4月に「文芸倶楽部」に一括掲載されたものである。作品は全体で十六章から構成されている。

その主題について見てみよう。

主人公の美登利は、色白で鼻筋の通った愛敬あふれる、闊達で、伸びやかで屈託のない少女として描かれている。その気性は男を男とも思わぬ負けじ気性で、

女郎といふ者さのみ賤しき勤めとも思はねば、過ぎし故郷を出立の当時泣いて姉をば送りしこと夢のやうに思はれて、今日此頃の全盛に父母への孝養うらやましく、お職を徹す姉が身の、憂いの愁らいの数も知らねば、まち人恋ふる鼠なき格子の呪文、別れの背に手加減の秘密まで、唯おもしろく聞なされて、廓ことばを町にいふまで去りとは耻かしからず思へるも哀れなり。

と説明し、「年はやうやう数への一四」であるが、通りを行く女義太夫を止めて、あけがらすをさらりと唄わせる大人顔負けの豪気な面も持っており、大人びた少女として描かれている。しかし、廓の派手さ華やかさ、見事さのみに心をうばわれて、お職を張る姉の苦勞や苦惱に気づいていない。なぜ、遣手新造が、「美ちゃん人形をお買いなされ、これはほんの手鞠代」と小遣い錢をくれるのか、大黒屋の主人や、両親、その他自分の周囲の大人たちがなぜ自分を大事に扱ってくれるのか、その真意に気づいていない。しかし、祭りの日の喧嘩を境に、学校へ行くのを嫌がり、やがて人が変わったかのようにになってしまう。

何時までも何時までも人形と紙雛さまとをあい手にして飯事ばかりして居たらば嘸かし嬉しき事ならんを、ゑゝ厭やゝ、大人に成るは厭やな事、何故このやうに年をば取る、最う七月十月、一年も以前へ帰りたいにと老人じみた考へをして、正太の此処にあるをも思はれず、物いひかければ悉く蹴ちらして、帰ってお呉れ正太さん、後生だから帰ってお呉れ、

幼友達の正太には何がなんだかさっぱり分からず、あきれより口惜しい思いで、目に涙さえ浮かべ帰っていく。母親はそんな美登利の様子に驚きもせず、正太が身体の具合でも悪いのですかと真面目に尋ねるに、「母親怪しき笑顔をして」「いゝゑ、少し経てば癒りませう、いつでも極りのわがまゝ様」と応えている。母親は美登利の様子を心配していないのは、その原因がわかっているからと思われる。それが母親の怪しき笑顔になっており、その原因は次の文に暗に示唆されている。

すべて昨日の美登利の身に覚えなかりし思ひをまうけて物の恥ずかしさ言うばかりなく、

美登利に何が起こったかははっきりと言及されていないが、廓に生きる女が、いつま

でも子供のままでいられるはずはなく、美登利にも其の運命がやって来たと思われる。美登利は廓の人間であることはどんなことかその現実を知っていく。そしてそれは信如への恋心を意識しだした時と重なるのである。それを知ったときの絶望感、心の苛立ち、戸惑いが美登利に上述のような態度をとらせるのである。

一方、*The Garden Party*の主人公ローラーは、園遊会の準備の最中に、近所の家でその家の主人が幼い子供を5人残して事故で亡くなったというニュースを聞く。パーティが終わった後、ローラーはお悔やみに行くが、そこで初めて死者と対面し、死というものに向き合うことになる。そこでローラーが目にした光景は次のように描写されている。

There lay a young man, fast asleep – sleeping so soundly, so deeply, that he was far, far away from them both. Oh, so remote, so peaceful. He was dreaming. Never wake him up again. His head was sunk in the pillow, his eyes were closed; they were blind under the closed eyelids. He was given up to his dream. What did garden parties and baskets and lace frocks matter to him? He was far from all those things. He was wonderful, beautiful. While they were laughing and while the band was playing, this marvel had come to the lane. Happy ... happy ... All is well, said that sleeping face. This is just as it should be. I am content.

これは全くローラーが予期していなかった光景で、ローラーはひたすら死者に謝ることになる。これまで塀に囲まれ護もられた楽園から、初めて塀の外の人生の現実に触れることで、これまで自分たちが幸せと信じてきたものがガラガラと崩れ、ローラーの心が激しく混乱動揺するのである。死=不幸と観念的に理解していたものが、現実 to 実際の死というものを目の当たりにした時、自分たちがあんなに大騒ぎしていたパーティも、楽団もご馳走も衣装も実は何の意味も無いのではないだろうか。死んでいるはずの死者が、'Happy, happy. I am content' と語っている。ローラーが人生の真実に目覚めていくその入り口の部分である。

心配して迎えに来た兄のローラーが「怖くなかったか」と尋ねるに、“No.” とすすり泣きながら答える。そして、“It was simply marvelous. But, Laurie \_\_”と言いかけて、“Isn't life,” “isn't life \_\_”と口ごもってしまうのである。

さらにマンスフィールドは、この作品について、1922年3月13日付けのWilliam Gerhardie宛の手紙の中で次のように書いている。

And yes, that is what I tried to convey in *The Garden Party*. The diversity of life and how we try to fit in everything, Death included. That is bewildering for a

person of Laura's age. She feels things ought to happen differently. First one and then another. But life isn't like that. We haven't the ordering of it. Laura says, "But all these things must not happen at once." And Life answers, "Why not? How are they divided from each other?" And they do all happen, it is inevitable. And it seems to me there is beauty in that inevitability.

人生の真実、人生の美はかならずしも整然としたものではないことをローラーたちの年齢の子供たちに分からせたかったと、マンスフィールドは語っている。

以上見てきたように、『たけくらべ』も *The Garden Party* も子供から大人への人生の現実に向き合い始める思春期の心の動揺、戸惑いを描いたものと言えるが、『たけくらべ』のほうが美登利と信如の恋心をからませているぶんだけ、作品に厚みがあると言える。

次に作品の構成を見るに、お祭りも、パーティもどちらも子供にとって、わくわく心躍る一大イベントである。そこには色とりどりに着飾った人々が大勢集まり、祭りのお囃子、楽団の音楽、色々な楽しい趣向、人々のおしゃべり、ご馳走、これらはみな共通している。『たけくらべ』の第二章は次のように書き出されている。

八月廿日は千束神社のまつりとて、山車屋台に町々の見得をはりて土手をのぼりて廓内までも入込まんづ勢ひ、若者が氣組み思ひやるべし、聞きかぢりに子供とて油断のなりがたき此あたりのなれば、そろひの浴衣は言はでものこと、銘々に申合せて生意気のありたけ、聞かば肝もつぶれぬべし、

祭りが人々に活気を与える様子が明るく、リズムカルにテンポよく描かれていく。美登利が皆に何か面白いことを工夫しようと言いだしたので、更に子供たちの祭りへの期待感が高まっていく。そして、祭り当日の賑わいの様子について、描写する。

打つや鼓のしらべ、三味の音色に事かゝぬ場処も、祭りは別物、酉の市を除けては一年一度の賑ひぞかし、三嶋さま小野照さま、お隣社づから負けまじの競ひ心をかしく、(筆者中略) 十四五より以下なるは、達磨、木兎、犬はり子、さまづの手遊を数多きほど見得にして、七つ九つ十一つくるもあり、大鈴小鈴背中にならつかせて、駆け出す足袋はだしの勇ましく可笑し、

しかし、祭りに喧嘩はつきものである。横町組の長吉グループが、美登利たちの表町組の子供たちが集まっているところへ、平素何かと癪に障る正太をこの機会にちょっと痛い目に合わせてやろうとなだれ込んでくる。その時、正太はたまたま夕飯を食べに家

に戻っていたために、その場にいなかった。代わりに、三五郎が痛めつけられることになる。止めに入った美登利の額に、「何を女郎め頬打たゝく、姉の跡つぎの乞食め、手前の相手にはこれが相応だ」と長吉の投げた泥草履が命中してしまう。この長吉の後ろに信如がいることを知って美登利は、「これより学校へ通ふことおもしろからず、我ままの本性あなどられしが口惜しさに、石筆を折り墨を捨て、書物も十露盤もいらぬ物にして、埒も無く遊びぬ。」とある。

やがて季節が移って、

二の替わりさへいつしか過ぎて、赤蜻蛉田圃に乱るれば横堀に鶉なく頃も近づきぬ、朝夕の秋風身にしみ渡りて上清が店の蚊遣香懐炉灰に座をゆづり、石橋の田村やが粉挽く臼の音さびしく、角海老が時計の響きもそゞろあわれの音を伝えるやうに成れば、四季絶間なき日暮里の火の光りも彼れが人を焼く烟りかとうら悲しく、

前半の明るいろズミカルな華やかな調子は一転して、しっとりして暗いものになって来る。秋風、さびしく、あわれ、うら悲しくと季節の移ろいと美登利の心境の変化を巧みに重ね合わせ、叙情性豊かな文章へとつながっていく。

一方*The Garden Party*でも、朝早くから、芝刈り機の軽快な音、家具を移動させる音、パーティ用のお菓子やお花が届く場面等、召使たちが家の中へ入ったり、出たりして、パーティの準備に家中が活気づいている様子がこれもリズムカルに、生き生きと描かれている。例えば、従妹のkittyから電話が架かってきて、

‘Coming!’ Away she skimmed, over the lawn, up the path, up the steps across the veranda, and into the porch. In the hall her father and Laurie were brushing their hats ready to go to the office.

Suddenly she couldn't stop herself. She ran at Laurie and gave him a small, quick squeeze. ‘Oh, I do love parties, don't you?’ gasped Laura.

‘Ra-ther,’ said Laurie's warm boyish voice, and he squeezed his sister too, and gave her a gentle push. ‘Dash off to the telephone, old girl.’

ローラーの弾むような気持ち、芝生の上を、庭の小道をピョン、ピョン跳ねるやうに駆けていく様子が、言葉のもつリズムに合わせて over, up, up と鼓動が伝わってくるようである。勢い余って、自分で止まることが出来ず、兄 (Laurie) にしがみ付くことで、兄妹の親密さが表現されている。やがて、パーティが始まる。そこのところは、次のように描写されている。



The band struck up; the hired waiters ran from the house to the marquee. Wherever you looked there were couples strolling, bending to the flowers, greeting, moving on over the lawn. They were like bright birds that had alighted in the Sheridans' garden for this one afternoon, on their way to—where? Ah, what happiness it is to be with people who all are happy, to press hands, press cheeks, smile into eyes.

ここには絵に描いたような、夢のようなすばらしい午後のパーティの光景が繰り広げられている。そしてゆっくり花びらが閉じるように、パーティが終わって、客人たち皆が帰った後家族が集まった席で、父親が事故のことを話し出し、ローラーは食物が入ったバスケットを持ってお悔やみに行くことになる。次の文章は、ローラーが家を出て、これからその家へ向かう場面である。

It was just growing dusky as Laura shut their garden gates. A big dog ran by like a shadow. The road gleamed white, and down below in the hollow the little cottages were in deep shade. How quiet it seemed after the afternoon. Here she was going down the hill to somewhere where a man lay dead, and she couldn't realize it. Why couldn't she? She stopped a minute.

見事な場面転換である。バラの花が咲きほこり、あでやかに着飾った人たちがそぞろ歩きしていた先ほどまでのパーティは嘘のように、静かな暗い穴倉へローラーは降りて行こうとしている。明るい華やかな舞台から一転して、暗い不安に怯えるこの暗転の仕方はやはりクライマックスである。

以上見てきたように、『たけくらべ』も *The Garden Party* も前半はお祭りやパーティの明るく賑やかな場面を色彩豊かにリズムカルに描き、そこに事件を絡ませて、場面の暗転をはかり、最後に象徴的な終わり方をしている。『たけくらべ』では

ある霜の朝水仙の作り花を格子門の外よりさし入れ置きし者の有りけり、誰れの仕業と知るよし無けれど、美登利は何ゆゑとなく懐かしき思ひにて違ひ棚の一輪ざしに入れて淋しく清き姿をめでけるが、聞くともなしに伝へ聞く其明けの日は信如が何がしの学林に袖の色かへぬべき当日なりしとぞ。

*The Garden Party* では、

But what life was she couldn't explain. No, matter. He quite understood.

‘Isn’t it, darling?’ said Laurie.

で曖昧さを残しながら終わっている。即ち、美登利もローラーも二人とも、何を思い、何を悟ったのか明確には語られていない。心の動きの結果として、顕われた事実だけを淡々と語り、原因の結果となっている主人公たちの心の動き、心の中を読者の推量に任せて終わっているといえる。

次に、構成上の技法について述べていく。

*The Garden Party*の中で、重要な小道具として作品の中に登場してくるのが帽子である。事故のニュースを聞いたローラーは、直ちにパーティを中止すべきだと、姉のJoseに相談するが、取り合ってくれない。そこでお母さんなら分かってくれると思って母親の部屋へ駆け込む。ところが驚いたことに母親も全く姉と同じ意見だったのである。まだ納得しかねて、ぐずぐずしているローラーにSheridan夫人は、たまたま手に持っていた帽子をローラーの頭にかぶせ、“My child! It’s made for you. It’s much too young for me. I have never seen you look such a picture. Look at your self!”と言って手鏡を差し出す。しかし母親のかざす手鏡も見ないで、まだ言い張っているローラーにSheridan夫人は痲癩を起こしてしまう。ローラーは自分の部屋に戻った時、全く偶然に部屋の鏡で自分の姿を見る。そのところは次のように描かれている。

There, quite by chance, the first thing she saw was this charming girl in the mirror, in her black hat trimmed with gold daisies, and a long black velvet ribbon. Never had she imagined she could look like that. Is mother right? She thought. And now she hoped her mother was right.

ここでローラーの気持ちはすっかり変わってしまう。ひょっとしたら、お母様の言う通りかもしれない、お母様は正しいのだと、ローラーは思ってしまうのである。黒い帽子は黄金色のデイジーの花で縁取られ、長いベルベットのリボンが下がっている魅力的な帽子である。作品全体を通じて、帽子が登場してくところが4ヶ所ある。最初は、従妹のKittyから電話が架かって来て、急いで玄関に飛び込んだ時、父親と兄がそれぞれ帽子にブラシをかけている場面である。次に、ローラーが電話で話している時、それを聞いていたSheridan夫人がローラーに、“Tell her to wear that sweet hat she had on last Sunday.”と呼びかけ、ローラーは電話でkittyに“Mother says you’re to wear that sweet hat you had on last Sunday.”と伝えている。この会話から、帽子が大変重要視されていることが分かる。

ローラーは、兄に事故についての自分の気持ちを聞いてもらおうと、兄のところへ行く。ところが、兄のLaurieもローラーの帽子を見て、“My word, Laura! You do look

stunning.” “What an absolutely topping hat!” と叫ぶ。ローラーは事件の事を言いそびれてしまう。又、パーティに来た人達もローラーの帽子を見て、口々に、

‘Darling Laura, how well you look!’ .

‘What a becoming hat, child!’

‘Laura, you look quite Spanish. I’ve never seen you look so striking.’

とほめそやす。

ところが後半で、ローラーはこの帽子を大変後悔し、死者に対して謝るのである。

Laura gave a loud childish sob.

‘Forgive my hat,’ she said.

とあるように、全篇を通じて帽子が重要な小道具として用いられているといえる。

一方『たけくらべ』の中で、重要な役わりをしているのが髪形である。

酉の市へ一緒に行こうと約束していた美登利が今朝からどこへ行ったか、分からず探し回っていた正太が、三五郎にどこへ行ったか知らないか、と尋ねると、「むゝ美登利さんはな今の先己れの家の前を通過って揚屋町の刎橋から這入て行た、本当に正さん大変だぜ、今日はね、髪を斯ういふ風にこんな嶋田に結って」と答える。廓の近くに住む男の子にとっても、島田髷は何を意味するか知っているから、大変だと言うわけである。すなわち、島田髷は少女から大人の女性になったことを示す髪形である。それは美登利が廓に入る日も近いことを示すから大変なのである。三五郎の話聞いて、正太は酉の市の人込みの中を探しにゆく。そこへ美登利が現れる。

揉まれて出し廓の角、向ふより番頭新造のお妻と連れ立ちて話しながら来るを見れば、まがひも無き大黒屋の美登利なれども、誠に頓馬の言ひつる如く、初々しき大島田結ひ綿のやうに絞りばなしふさゝとかけて、鼈甲のさし込、房つきの花かんざしひらめかし、何時よりは極彩色のたゞ京人形を見るやうに思はれて、正太はあつとも言はず立止まりしまゝ例の如くは抱きつきもせで打守るに、(筆者中略) 正太はじめて美登利の袖を引いて好く似合ふね、いつ結ったの今朝かへ昨日かへ何故はやく見せてはくれなかった、と恨めしげに甘ゆれば、美登利打しほれて口重く、姉さんの部屋で今朝結って貰ったの、私は厭やでしようが無い、とさし俯向きて往来を耻ぢぬ。

この髪形を変えた時点から、美登利は以前の美登利でなくなってしまうことを示唆

している。そしてそれは、少女から大人へと変わるだけでなく、美登利の人生もこれまでの活発な性格さえも変えてしまい、うつむいて往来を行くようになる。

美登利の髪については、第三章の初めに

解かば足にもとどくべき毛髪を、根あがりに堅くつめて前髪大きく鬢おもたげの、  
緒熊と言う名は恐ろしけれど、此鬢を此頃の流行とて良家の令嬢も遊ばさるゝぞかし

と、紹介されており、また祭りの日の装いについて、「ひるの暑さを風呂に流して、身じまいの姿見、母親が手づからそゝけ髪つくろいて、我が子ながら美しくきを立ちて見、居て見、首筋が薄かったと猶ぞいひける」と、美登利の美しさに母親もうっとりしているのである。良家のお嬢さん風に結い上げた髪で、誇らしげに闊歩していたであろう美登利が、ローラーが帽子を恥じたように、島田鬢の自分を恥じるのである。

憂く耻かしく、つつましき事身にあらば人の褒めるは嘲りと聞なされて、嶋田の鬢のなつかしさにふりかへり見る人たちをばわれを蔑む眼つきと察られて、正太さん私は自宅へ帰るよと言ふに（筆者中略）正太さん一処に来ては厭だよと、置き去りに一人足を早めぬ。

人間の印象の中で、一番威力を発揮するのは顔である。その顔を縁取るものに帽子、あるいは髪形がある。帽子も髪形も頭の上に載せることから言えば同類である。

18、9世紀のイギリスでは帽子が社会的身分を表す服装の一部として重要視された。有産階級の紳士や淑女がかぶる帽子はおのずと無産階級の労働者がかぶる帽子と違っていた。帽子に対するこだわりは強かったと考えられる。

一方、日本でも江戸時代まで髪形は社会的身分を表すものとして、武士のちょん鬢と町人のちょん鬢とは違っていた。明治時代になって男性のちょん鬢は廃止になったが、女性の髪形は残っていた。例えば未婚者と既婚者の髪形である桃割れ、丸鬢、少女から娘になったことを表す島田鬢、その他銀杏返などは残っていて明治時代の女性にも結われたのである。帽子とか髪形は人の印象をがらりと変えてしまう強い力をもっているものである。一葉もマンスフィールドも、こうした小道具を巧みに用いることによって、言語化されない主人公たちの心の奥を伝える表出法に成功している。

次に表現上の特徴についていくつか検証してみる。

まずその書き出しについてであるが、『たけくらべ』の書き出しは、

廻れば大門の見返り柳いと長けれど、お歯ぐろ溝に燈火うつる三階の騒ぎも手に

取る如く、明けくれなしの車の行来にはかり知られぬ全盛をうらなひて、大音寺前と名は仏くさけれど、さりとは陽気の町と住みたる人の申しき、

と、浄瑠璃の語りを連想させるように、柳の枝の長い、距離が長い=遠いと院本調の七五のかけ詞の修辞法が巧みに用いられ、口調よく印象深い書き出しである。一葉は女義太夫の瑠璃を聴きに行ったり、又義太夫の本も読んでいたそうである。

「廻れば」と動詞で始まることで、お芝居のように役者が動き出す、平面ではなく立体的情景がかもし出される戯作調の見事な書き出しである。その他、例えば、『にぎりえ』では、

おい木村さん信さん寄ってお出よ、お寄りといったら寄っても宜いではないか、又素通りで二葉やへ行く気だらう、押かけて行って引ずって来るからさう思ひな

といきなり台詞で始まっている。これも舞台の幕開きを思わせるような戯作調的な書き出しである。即ち、いきなり読者を作品の場面に引きずり込む見事な書き出しであると言えよう。

一方、*The Garden Party*では、次のようにAndで始まっている。

And after all the weather was ideal. They could not have had a more perfect day for a garden party if they had ordered it.

そして結局、なんのかの言っても、天候は理想的なパーティ日和であったわけで、読者は作品が始まる以前から、関わっていたような切り出し方である。その他、例えば、'The Singing Lesson' では、

WITH despair-cold, sharp despair-buried deep in her heart like a wicked knife, Miss Meadows, in cap and gown and carrying a little baton, trod the cold corridors that led to the music hall.

と書き出されており、読者はいきなり主人公の心理状態に投げこまれる。前後の説明することなしに、いきなり物語の渦中に読者を引きずり込んでしまう。即ちそれまでの状況や事情を読者の想像に任せることで、読者を作品の中に参加させているわけである。それは、読者の想像力というものを信頼して、詮索は読者に任せていると言えよう。それは作品の終結においても同じである。『たけくらべ』では 誰が何のためにいつ花を投げ入れていったのか、いっさい言及されていない。もっぱら、読者の推量に任せられ

ている。*The Garden Party*でも、Laurieは何がどう分かったのか、何をどう理解したのかについて漠然とした曖昧さが漂う。作者はその詮索を読者に任しているわけで、作者は我々読者側の想像力を信用し、読者に作品を預けていると言ってよいと思う。

最後に省筆の妙について述べてみたい。

一つひとつのエピソードは精緻な筆致であたかも現前に活けるが如く描かれて、その拔群の描写力、描写力の確かさに読者は魅了されるわけだが、しかし、物語の要の人物については、あまり詳しくは語られていないところがある。例えば、『たけくらべ』では、信如の父親である大和尚や正太の祖母については詳細に語られ描写されているが、美登利の母親については、正太が美登利の家を訪ねた際のやり取りだけである。例えば「おゝ正太さん宜く来てくださった、今朝から美登利の機嫌が悪くて皆あぐねて困っています、遊んでやっってください」と言う会話や、美登利が雨の中で難儀している信如を格子の陰から伺い見ている時に、呼び戻す声だけである。読者は美登利の母親の人物像については詳細な情報は与えられていない。母親の怪しき笑顔が何を意味するか、読者は推量し察知するだけである。

一方、*The Garden Party*の中のローラーの母親、Sheridan夫人についても同様である。例えば、花屋が花を届けに来た時、“I was passing the shop yesterday, and I saw them in the window. And I suddenly thought for once in my life I shall have enough cannalilies. The garden party will be a good excuse.”とローラーに説明している場面や、ローラーが事故のことを母親に告げに行く場面で、

‘Mother, a man's been killed,’ began Laura.

‘Not in the garden?’ interrupted her mother.

‘No, no!’

‘Oh, what a fright you gave me!’ Mrs. Sheridan sighed with relief, and took off the big hat and held it on her knees.

こうした会話から、読者はSheridan夫人の性格を推量していくしか方法がない。

人が死んだと聞いて、「まさか庭ででないでしょね」と言って、庭でないことを知ってほっとする、自分の領域以外には関心のない、しかし夫からは冷淡な人間と見られたくないために、子供のローラーに弔問に行かせる母親から、どんな母親像を描くだろうか。一葉もマンスフィールドも微に入り細に入り入念に描写している場面と、読者の推量・想像にまかせる部分と、巧みに使い分けている。省筆により、かえって多くのことが語られることを作者は知悉しており、詳細な描写と省筆のバランスが作品に緊張感をもたらしているといえる。

## IV. おわりに

これまで見てきたように、『たけくらべ』も*The Garden Party*もテーマは少女から大人への思春期ものである。そして、その構成は『たけくらべ』は夏から秋への季節の移ろいの中で、*The Garden Party*は一日の時間の移ろいの中で、その風景描写と主人公の心象風景とを見事にだぶらせている。作品の中の小道具の使い方も効果的で巧みである。いきなり読者を作品の渦中へ引き込む書き出しの妙筆、精緻な描写と省筆のバランス、作者の読者に対する参加期待度がともに非常に高い作品と言えるのではないだろうか。一葉もマンスフィールドも100年近く読み繋ながれてきた作品の魅力はここにあると思われる。時代と共に読者も変わる。社会の風俗・風習も変わる。社会的規範も変わる。道徳さえも変わる。その中で作品が色あせることなく生き続けるためには、其の時そのときの読者の想像力を取り込んで、読者が作品の中に参加できるような仕掛けが周到に作品の中に用意されており、作者が読者の想像力や推量する力を信頼して、作品を読者に預けているからだと思われる。

一葉は父親の死後、母と妹の家族を養わねばならない立場におかれ、幼少より得意としてきた文筆を稼業とせざるを得なかった。一方マンスフィールドは、父親が銀行の頭取であるブルジョワ的な家庭の退屈さを嫌って、自立した女性として生きるために、作家を目指して一人荒波に漕ぎ出して行った。

二人の作家への動機、事情は両極端に違っているけれど、そこに生み出された作品の文学的特質はきわめて類似性の高いものであるといえる。

マンスフィールドは「どんな立派な主義・主張・イデオロギーも30年も経てば、カビが生え、ジレンマも忘れ去られていくが、永遠に残るのは生き生きとところに蘇える描写だけだ」と語ったが、まさに一葉文学もこれに値する。近代文学の長い歴史を持つイギリスの作家マンスフィールドと、ほとんど欧米の文学に触れることのなかった一葉がこのように近い作品を残していることは、一葉文学は日本の古典であると同時に世界の古典であることをあらためて思う。

## 注)

(1) *Journal of Katherine Mansfield*, ed. J. Middleton Murry (Howard Ferig) p.14

(2) 1888年(明治21)金港堂より発行された最初の文芸誌。95号に『うもれ木』掲載テキストは

- ・ *Katherine Mansfield : The Garden Party and Other Stories* (Penguin Books) 1974
- ・ 『樋口一葉 小説集』 菅 聡子編 ちくま文庫 筑摩書房 2005
- ・ 『樋口一葉 日記・書簡集』 関 礼子編 ちくま文庫 筑摩書房 2005

を使用した。

## 引用・参考文献

- ・ *The Short Stories of Katherine Mansfield* (Alfred A Knopf, Inc.) 1980
- ・ *The Life of Katherine Mansfield* (Antony Alpers The Viking Press) 1980
- ・ *The Letters of Katherine Mansfield, ed. J. Middleton Murry* (Howard Ferig) 1974
- ・ 『マンスフィールドとモダニズムの小説の起源』 Sydney Janet Kaplan 大澤銀作訳  
文化書房博文社 1994
- ・ 『マンスフィールドの文学』 玉井三枝子著 (株)ニューカレントインターナショナル1988
- ・ 『キャサリン・マンスフィールド—世紀末、モダニズム—』 三神和子著 辞游社 2000
- ・ 『キャサリン・マンスフィールド 想像力の世界』 小田 忠著 あぼろん社 1979
- ・ 『全集樋口一葉 小説1. 2.』 前田 愛編 小学館 1979
- ・ 『樋口一葉 「たけくらべ」 作品論集』 高橋 俊夫編 クレス出版 2001
- ・ 『たけくらべ・にごりえ 樋口一葉』 岡田八千代校注 角川文庫 角川書店 2005
- ・ 『樋口一葉 「いやだ!」 と云ふ』 田中優子 集英社新書 集英社 2005
- ・ 『現代語訳 樋口一葉 たけくらべ』 松浦理英子他訳 河出文庫 河出書房新社 2005